

埋蔵文化財
探訪シリーズ

REKIMIN.
レキミン

るぽ

最終回

城ヶ谷遺跡

(その二)

城ヶ谷一号墳の石室は横穴式石室で、天井や側壁の石はありませんでしたが、石室内には、副葬品の須恵器や鉄刀が置かれていました。このほか、土製の玉が約百六十個



二号墳の横穴式石室と小石室

と碧玉製管玉、ガラス玉が一個ずつ出土しています。古墳の大きさは、墳丘の土が流れてなくなっており、古墳の周りの周溝も検出されなかったためにわかりません。副葬品の須恵器から推定すると、城ヶ谷一号墳が造られたのは、六世紀後半ごろと思われる。城ヶ谷二号墳は、一号墳より北へ約十五メートルのところで見つかっています。幅一・二・五メートルの円弧状の周溝から、推定で十

二ヶ月前後の円墳であったと考えられます。墳丘の土は流れてなくなり、石室が二基残っていました。一基は、全長約六メートルの横穴石室で、もう一基は長さ一・七メートルの小石室です。横穴式石室には、須恵器、土師器、鉄刀、鉄鍬、金環、滑石製紡錘車(糸をつむぐ道具)、ガラス玉、碧玉製管玉、ナツメ玉などの豊富な副葬品が幸運にも残っていました。二号墳の時期は、一号墳よりも少し新しく、六世紀末から七世紀初めと推定されます。調査区の南東では、埴輪がまとまって出土しており、古墳があったと思われる。このように、古墳がまとまって造られていることから、古墳群が形成されていたと思われる。埋蔵文化財探訪シリーズ「レキミン・るぽ」は、今号で終わります。